

宇治拾遺物語の文体

——今昔物語集との比較から——

浦 野 洋 美

序

幾多の説話文学の中で「宇治拾遺物語」ほど他の説話集との伝承関係が取り沙汰されてきた作品もあるまい。それほど「宇治拾遺物語」は幾多の説話集と共通した説話を持ち、一九七話中、共通性のない独自の説話は五〇余話を数えるのみで、あとは総て何らかの形で他の説話集と同文的な要素や内容を持ち、中には完璧に近いほどの一致を示しているものもある。しかしながら、どんなに伝承問題が論じられても、そこには他の説話集には見られない「宇治拾遺」独自の姿が認められるのである。これこそ「宇治拾遺」の本質に繋がるものであり、すぐれた文学的作品たらしめる一因となつていふように思われるのである。

このような点を考慮して、ここでは「宇治拾遺」と最も多くの同文的な説話を持つ「今昔物語」（この「宇治拾遺」と共通した

要素や内容を持つ説話は一九七話ほどある）と比較することによつて、「宇治拾遺」の性格を探り、その本質を幾らかでも考えていこうとするものである。

一般に、「宇治拾遺」はその先行作品たる「今昔物語」と説話の摂取形態が類似している上に、その質量の点においても劣性であるため、ともすると、その亜流の作品と見なされがちである。確かに、「宇治拾遺」は説話文学中にあつては傑出した作品であるものの、文学史上にその位置を決定づけた「今昔物語」の如き画期的な役割を果たすまでには至らなかつたし、その収録説話数も少く編纂形態も雑然としたものになつていふ。

このような外面的に不利な条件を備えているにもかかわらず、両書に共通している説話を検討すると、「宇治拾遺」は「今昔」の踏襲的なものではなく、説話によつてはむしろはるかに文芸性が高いと思われるものも持つていふ。このような評価が生ずるの

も「宇治拾遺」の本質が「今昔」のそれとは殆んど異つたものを包含しているからではないかと想像されるのである。

たとえば、さまざまな角度からよく引用される例であるが、「今昔」巻第二十四の第五十六話「播磨国郡司女読和歌語」と「宇治拾遺」第九十三話「播磨守為家侍さたの事」とについてみると、この両説話の原話は恐らく同じものであり、この両者の間には何らかの書承関係を想起せざるを得ないほどその文意や表現描写に共通性が認められるのであるが、一方、そこに意図されている主題は、前者では「郡司の家に使われている女に和歌の教養がある」という点に、後者においては「女から受け取った和歌を理解できない無教養な『さた』という侍の失敗」にそれぞれ置かれ、両説話の相違点を示している。この主題の相違は「今昔」とは異なる「宇治拾遺」の性格の一端を反映した結果にはかならないのである。すなわち、これまでのごとく、「宇治拾遺」は貴族や高僧、あるいは優れた才能を持つ、いわば特権階級に属する人間の実績や高德、教養等をはめたたえるという常套的な表現態度を捨て去ることはできなかつたが、そこから更に一步出て、日常茶飯事における人間の愚かしい行動や笑止の沙汰に現われた人間性を捉えようとする態度を常に持ち続けてきたことの現われを意味しているのである。

このことは至る所に会話を駆使して、「今昔」に較べてはるかに粗雑な描写を補うという利点を得たのである。しかもそれによつて、「今昔」では充分に描き得なかつた下層階級の武士や庶民の姿を、生きた人間像として、つよく生き生きと描写することができたのであり、それが時には「宇治拾遺」の中に「今昔」よりも優れた文学性を認めさせる要因として働いているのである。さきに引用した両書の説話はこの点を明らかにしている適例ではないかと思われる。「宇治拾遺」の性格はこのように解釈的立場から触れることが可能であるが、又、文体面からも何らかの形で示される可能性を予想して、文体上から「宇治拾遺」の性質を考えていきたい。

文体の上から、しかも「今昔」との比較の中で「宇治拾遺」の性格を考えるに当つて、二、三の点が指摘されるが、ここでは「和文化された和漢混淆文」という点に限定して述べていくことにする。これは両書を読み較べた印象から感知できる周知の事実だが、ここでは実証的な裏付けを通して、この文体的特徴をより一層具体化させ、「宇治拾遺」の本質を探る一助にしたい。

この点を検討するにあつて次の事項をあらかじめ考慮したい。

- 1 「宇治拾遺」および「今昔」に共通性を持つ一九七説話の

うち、特に同文的色彩の濃い六二話以外の一三五話は総て対象外として除外する。

2 紙面の都合上、両書の文体は助詞・助動詞の面からの検討に限定する。但し、漢文訓読体に非常に多く用いられる「ヨ以テ」「ニ依テ」「ガ故ニ」「トシテ」「ヨシテ」「ニシテ」は助詞的用法を持つものとして考察の対象と見做す。

3 「宇治拾遺」も「今昔」も共に和漢混淆文であり、特に「今昔」は卷二十以後においてははるかに和文的になつてゐるため、「宇治拾遺」の和文文化、あるいは「今昔」の漢文化を明確に規定することが困難なため、和文と漢文で使い分けられる傾向にある助詞・助動詞を選び分けて考察する。

4 結果を一括して表にする時、煩雑を避けるため「宇治拾遺」の説話を「今昔」の各巻に合わせて統一をはかる。

一 助詞からの考察

(一) 動作の対象を示す格助詞「を」

一般に漢文訓読体においては、その訓点法から客語（動作の対象となる語）を明確に表わしている。そのため客語を明示する格助詞「を」の使用数が当然多くなることは予想されるのであり、明らかに漢文訓読系統の文体はその傾向を持つてゐる。それに反

して「源氏物語」のような和文脈の文体では、格助詞「を」やそれに伴う目的格語を省略する場合の多いことが知られて^{註2}ゐる。従つてこのような傾向を持つ格助詞「を」を両書の比較対象の規準とすると、次のような表を得る。（表1）

なおこの表は目的格（客語）を示す「を」を対象とし、「動作の起点」を表わしたり「經由場所」、「に」の意味を表わす用法の「を」は総て省略した

この表によると、「を」ははるかに多く「今昔」において示されている。「宇治拾遺」に使用されている「を」のうち、「今昔」と共通しているものは八〇三語（全体の七六％）に及んでいるので、「宇治拾遺」に使用されている「を」のほとんどが「今昔」に存していると見ることができよう。「宇治拾遺」の「を」の使用度が「今昔」に較べてはるかに低いのは、両書の文体の長短による影響も考えられるが、やはり「宇治拾遺」が「今昔」より頻繁に動詞の目的格語や、それを表示する「を」を省略しているためと考えられるのである。勿論「今昔」でも「ヨ」を略していないわけではなく、和文的傾向が強いと言われている卷二十以下の巻々に一一例ほど認められるのであるが、「宇治拾遺」において省略されていると思われる「を」が六二説話中、二〇〇箇所ほどあり、又、目的格語を省略した場合が四四例ほど考えられるのに

今昔 巻数	今	字	今昔、宇治 共通数
四	32	18	10
五	168	107	72
六	20	12	6
九	60	31	25
十	136	85	77
十四	92	62	38
十五	45	11	8
十六	190	113	63
十九	96	52	40
二十	243	104	88
二十三	186	124	105
二十四	89	65	42
二十五	58	19	13
二十六	124	90	81
二十七	19	13	10
二十八	133	88	78
二十九	33	23	16
三十二	53	29	24
計	1801	1056	803

表 1

この表のうち、「今」は「今昔」における「を」の使用数を、「字」は「宇治拾遺」の「を」の使用数を示す。

又「今昔」の巻数で両書の共通説話を統一している。

較べると、はるかに少ない。このような「を」についての結果は、「宇治拾遺」の和漢混淆文が「今昔」のそれより和文的傾向にあることを肯定していると思われるのである。

(二) 動詞の進行するその目標所在の方向を示す格助詞「へ」

註³ いわゆる方向を示す格助詞「へ」は漢文訓読体の文においては、用言の修飾表現、婉曲表現が貧弱であるなどの理由からであろう

か、余り用いられず、その代りに格助詞「に」を当てている場合が多い。一方和文体の文中では「に」と共に「へ」を併用していることが平安朝の仮名文学からすでに明らかである。そこで「宇治拾遺」の文体傾向を探る目安の一つとして格助詞「へ」を取り上げ考察する次第である。

まず両書の使用状況を見ると次のごとくである。(表2)

今昔 巻数	今	字
四	0	3
五	2	9
六	0	0
九	5	4
十	2	5
十四	0	4
十五	0	1
十六	9	10
十九	2	5
二十	2	11
二十三	5	8
二十四	3	6
二十五	1	2
二十六	2	8
二十七	1	2
二十八	3	2
二十九	0	0
三十二	0	0
計	37	80

表 2

この表から、一、二の出入は認められるものの、総じて「宇治拾遺」中の「へ」の使用度が高いことが窺われる。これは両書を比較する際、「今昔」が格助詞「へ」の代りに「に」を頻用しているためと認知される。ちなみに「宇治拾遺」に使用されている「へ」に対して「今昔」が当てている「に」は四〇例ほど数え上げることができる。逆に僅かではあるが、「今昔」の「へ」に対して「宇治拾遺」で「に」を用いている場合が二例ほどある。両書ともこの他に方向を示す助詞として「に」を頻用しているが、「へ」に限定して検討すると以上のような結果が出てくるのである。

り、両書の文体系統を暗示した使用状況ではないかと思うのである。

③ 格助詞『にして』と格助詞『にて』

「にして」と「にて」は共に、場所や時を表わす格助詞として使われているが、^{註4}前者は漢文訓読体の文に、後者は和文体の文に幾分使い分けが見られるので、この点から両書の文体傾向を探ってみたい。

格助詞「にして」の両書の使用状況は次の通りである。(表3)

今昔 巻数	今	宇
四	0	0
五	0	0
六	0	0
九	1	(1)
十	1	1
十四	1	0
十五	(1)	0
十六	5	0
十九	1	0
二十三	5	0
三十三	0	0
三十四	2	0
三十五	0	0
三十八	1	0
三十七	0	0
三十八	0	0
三十九	0	0
三十二	0	0
計	18	2

表 3

() は時を示す「にして」を表わし、その他は総て場所を表わす「にして」の用法を持つ。

「にして」はこの表から見ると、「今昔」に、それも特に漢文

れき。

(字 197)

キ。

今巻十(15)

的色彩が濃いと言われている巻二十以前に多く認められる。「宇

○十余歳にして失せにけり。

幼クシテ死ヌ。今巻九(18)

治拾遺」にも巻九(18)、巻十(15)と同文的な第百六十七話第百九十七

(字 167)

話に一例ずつ見られる。

その一例は「今昔」と共通であり、もう一例は「宇治拾遺」のみ

○「……衛の門にしてころさ

「……衛ノ門ニシテ被紋レニ

の場合である。この第百六十七話は漢文的色調の巻九にある説話

と同源と考えられる上に、『ある唐人女の羊に生たる知らずして殺す事』の題名でも分かるように、中国の説話を題材にしている。この、これまでの編者の筆録態度（すなわち、中国の話を題材にしている説話では漢文的表現が非常に多いために、そこにはまさに編者の態度が反映していると思われるのである）を考慮すると、この「にして」の使用は、多分に意図的なものではなかつたかと想像されるのである。

「今昔」のこの一八例の「にして」の内、四例は「宇治拾遺」と対応関係を持つていないが、他の一四例は何らかの形で「宇治拾遺」に対応している。具体的に示すと、

(a) 格助詞『にて』で対応している場合……九例

塚のうへにていふなりけり。 (宇18)	墓ノ上ニシテ、云也ケリ。 今卷二十六(17)
御前にて、師の僧よびて (宇86)	観音ノ御前ニシテ、師ノ僧ヲ 呼テ、 今卷十六(37)
清水の橋のもとにて (宇95)	清水ノ橋殿ニシテ今卷十九(40)
この御前にて、干死に死なん。 (宇96)	此ノ御前ニシテ干死ニ死ナム。 今卷十六(28)
大門にてけつまづきて(宇96)	大門ニシテ趾蹟テ、 今卷十六(28)

娑婆世界にて何事かせし。

(宇102)

「…このしもの渡にて、舟うち返して死ぬ」

(宇164)

伝教大師のもろこしにて

(宇168)

「唐へわたらん舟の中にて伝む」とて

(宇185)

(b) 格助詞『に』で対応している場合……三例

主のもとにありけるおなじ様な侍と、

(宇86)

台盤のうへに躍らする事などをしけり。

(宇106)

孔子すゝみ出て、庭にたちて

(宇197)

娑婆ニシテ何ナル功德カ造タル

今卷十四(29)

水中ニシテ船打返シテ死ヌ」

今卷九(13)

伝教大師、震旦ニシテ

今卷二十(34)

「…宋ニ渡ラム時ニ、船ニシテ伝ヘム」ト云テ、今卷二十四(22)

主ノ許ニシテ同様也ケル侍ト

今卷十六(37)

大盤ノ上ニシテ、生乍踊セナド為ル事ヲナムシケル。

今卷二十(10)

孔子、盜跖ガ前ニ進ミ出デ、

庭ニシテ、先ヅ盜跖ヲ礼シ給フ。

今卷十(15)

以上のことから考えると、「にして」の使用度が高い「今昔」の方が漢文的色彩が濃いとみられるだろう。

格助詞『にて』

	今	字	今昔、字治 共通数
四	0	2	0
五	3	15	1
六	0	1	0
九	2	4	1
十	3	5	2
十四	9	12	3
十五	0	2	0
十六	17	28	6
十九	4	6	1
二十	11	20	2
二十三	25	17	8
二十四	15	15	7
二十五	7	5	2
二十六	11	16	9
二十七	8	8	3
二十八	11	17	7
二十九	5	0	0
三十	14	11	5
計	147	182	57

表 4

格助詞「にて」の使用状況は卷二十三以降は「今昔」の方が

「字治拾遺」に較べて多用されているが、全体的にみると、「字治拾遺」における「にて」の使用度の高いことが認められる。こ

の「字治拾遺」の「にて」は前述の如く「今昔」中の「にして」に対応する他に、格助詞「ニ」や「ヲ以テ」「ニ依テ」「ヲシテ」のような助詞的用法を持つものなどにも対応して用いられている。

(a) 「今昔」中の『ニ』に対して用いられている場合

いみじき上手にて有けり。

(字 25)

雑色なにがしと申者にて候。

(字 29)

かたはらにて聞く人は、

修行者にて候。

(字 173)

(字 86)

それが弟にて、

(字 185)

おのれは口てづゝにてえしり

侍らじ

(字 185)

丈六の御すがたにて紫磨黄金

の光を放て

(字 195)

又おなじき弟子にて

(字 197)

(b) 格助詞『ノ』に対して使用されている場合

中大童子にて、みえもきたな

げなく有ければ

(字 25)

中童子ノ見目モ穢氣无クテ

今卷二十八(20)

亦、汝ガ弟子ニ、

今卷十(15)

丈六ノ姿ニ紫磨黄金ノ光ヲ放、

今卷六(1)

不待ズ。

今卷二十四(22)

己ハ、口ツゝニ侍レバ、知リ

其ノ弟ニ、今卷二十四(22)

今卷二十(39)

修行者ノ聖人ニ候。

今卷十六(37)

(c) 『ヨシテ』に対して用いている場合

ひた青なる装束にて、青き食
物ノ限ヲ持セテ参タレバ
(字124)

今卷二十八(21)

(d) 『ヨ以テ』『ニ依テ』に対応して用いられている場合は、それぞれ一五例、三例ほど見られるが後の部分に一括して記すことにしたい。

(e) その他の場合

思ひ懸ぬことにてとらへられ
て
(字86)

不思議ヌ事ニ係テ被捕テ、

今卷十六(37)

かく川にて流るゝ也
(字102)

此ク河ニ成テ流ルゝ也

今卷十四(29)

わなゝき声にて、うちいだす
(字111)

ワナナキ声ヲ捧ゲテ此ナム云

今卷二十四(55)

以上の場合とは逆に「今昔」に用いられている「にて」に対して「宇治拾遺」で格助詞「に」を使用している場合も僅かにある。

水の流出たる所に、舟をとゞ
めて
(字39)

水ノ流れ出タル所ニテ船ヲ留
メテ、
今卷二十九(31)

両書における「にて」の使用状態はかくのごときものであるが、この結果では、一応「宇治拾遺」は「今昔」より和文的と考える

ことができよう。満足な結果は得られなかったが、「宇治拾遺」と「今昔」では格助詞「にて」と「にして」の使い分けがみられるのである。

四 逆説の助詞『とも』『ども』『ど』等

接続助詞「とも」「ども」「ど」は逆接の用法で古くから和漢両文体に使用されてきたが、^{註5}「ども」と「ど」の間には幾分相違が見られ、前者は漢文系統の、後者は和文系統の文体に広く分布している。これらの助詞に関して、平安時代の漢文系統の文献には「トイフトモ」「トイヘドモ」の語形がみられる。これらの語形は「格助詞『ト』+動詞『言フ』+ドモ」の形を持つ複合助詞^{註6}と思われ、一つの助詞として扱つてよいものか否か分らないが、^{註6}それらが原漢文の「雖」などの漢字を忠実に訓読した結果、できたものであり、その訓み方が固定して後世の漢文訓読体の文章に伝わったと考えられているので、ここでは一つの助詞として、「とも」「ども」「ど」と共に、両書の文体系統を探る指針として扱つていきたい。

それらの使用状況を表にまとめてみた。(表5)

以上の表によると、「宇治拾遺」は「今昔」に較べて、多少の出入はあつても、ほとんどその使用状態に大差がないが、「とい

	ど も		と も		といふとも		ど も		といへども	
	今	字	今	字	今	字	今	字	今	字
四	0	0	0	(1)	0	0	2	1	0	0
五	0	0	0	0	(1)	0	5	6(1)	6	0
六	0	0	0	(1)	0	0	0	0	(3)	0
九	0	(1)	(1)	(1)	0	0	1	0	0	0
十	0	3(1)	0	(1)	1	0	9(5)	5(3)	5(4)	0
十四	1	0	(1)	(2)	0	0	4(1)	7(2)	4(1)	0
十五	0	0	0	0	0	0	0	1	3(1)	0
十六	0	15(8)	(2)	(6)	(2)	0	22(7)	24(10)	6(2)	0
十九	0	2(1)	0	0	0	0	8	4	0	0
二十	0	5(2)	2	(2)	(1)	0	11(5)	12(3)	5(1)	0
二十三	1	2(1)	2	7(4)	(2)	0	16(8)	16(6)	0	0
二十四	1	(1)	(1)	(2)	(2)	0	12(1)	10(3)	(2)	0
二十五	0	0	0	4(2)	(1)	0	(1)	2(1)	(1)	0
二十六	0	4(1)	0	1	0	0	13(3)	13(1)	0	0
二十七	0	1	0	0	0	0	3	1	(1)	0
二十八	0	5(2)	(1)	(2)	0	0	4(2)	2(1)	0	0
二十九	0	0	(2)	1	0	0	0	0	0	0
三十	0	0	4(3)	2(1)	0	0	4(1)	4(1)	(1)	0
計	3	39(18)	16(11)	37(25)	10(9)	0	115(34)	108(32)	37(17)	0

表 5

カッコ内の数は会話文中に示されている接続助詞の数を示す。

ふとも」「といへども」に至ると、その使用は皆無である。それに反して、「ど」について見た場合、「今昔」の三例に対して、「宇治拾遺」は三九例と圧倒的に多用している。こうした状況が反映されてか、「宇治拾遺」にはしばしば、「今昔」における「ども」の使用箇所を「ど」をもつて言い換え、表現している場合が見られるのである。このような転換は二〇例ほど数えることができる。二、三例を挙げると、

仏の賜びたる物に候へど、かく仰ごと候へば、
 「こはいかに」といへど、いはすべくもなきにあはせて
 (字 96)

いとほしくおぼしめせど、す

(字 108)

観音ノ給タル物ナレドモ、此ク召セバ
 「此ハ何ニ」ト云ヘドモ、辞ナビ可得クモ无キニ合セテ
 今卷十六(28)

今卷十六(4)

糸惜ト思食セドモ、可給キ便

こしにてもあるべきたよりの
 なければ
 (字 130)
 逆接の接続助詞について両書を考えると、比較的是つきりした区別が以上の結果から認められるのであり、「今昔」は漢文訓読体の濃い性格を、「宇治拾遺」は和文体的性格を明らかにしているように思われる。

(五) 副助詞『だに』『すら』『ソラ』

両書を比較した時にその差異が最も良く現われる副助詞は「だに」と「すら」(ソラ)である。「さえ」は六二話中、「宇治拾遺」に四例、「今昔」に二例見えるだけであり、相違点はほとんど認められない。

両助詞の使用状態を表にすると次のようになる。(表 6)

	すら(ソラ)		だに	
	今	字	今	字
四	0	0	0	0
五	0	0	0	0
六	0	0	0	0
九	0	0	0	0
十	2 _{ソラ}	0	0	2
十四	0	0	1	1
十五	0	0	0	2
十六	0	0	3	6
十九	1 _{ソラ}	0	2	2
二十	0	0	2	1
二十三	0	0	3	2
三十四	1 _{ソラ}	0	6	11
三十五	0	0	2	2
三十六	0	0	4	4
三十七	0	0	0	0
三十八	1 _{ソラ}	0	1	3
三十九	0	0	0	0
四十	0	0	0	0
計	5 _{ソラ}	0	24	33

表 6

「だに」について見ると、その使用数では「宇治拾遺」の方が多
いが、「すら」（今昔ではすべて「ソラ」）になると、「宇治拾遺」
にその用例が全く見られない。それは、個々の説話を検討すると、
「今昔」に使用されている「ソラ」が「宇治拾遺」ではすべて
「だに」で表現されているという現象を物語っている。その例を
挙げると、

我らが涼みにくるだに、あつ
く苦しく
(宇30)

もとより見馴れなどしたらん
にてだに、うとからん程はさ
やあるべき
(宇93)

鬼の飲ませんだにものむべ
くもなき湯を、心と泣く／＼の
む也けり。
(宇112)

心ばせある人だにも、物つま
づき倒ることは、つねの事な
り。
(宇162)

以上の個所が指摘される。このような現象を加納協三郎氏は
「院政鎌倉期に於けるダニ、スラ、サヘ」（『国語と国文学』第十

我等ガ若キソラ冷マムガ為ニ
来ルソラ、猶苦シキニ、
今巻十(36)

本ヨリ見タラム女ソラ疎カラ
ム程ニ然カハ可有。
今巻二十四(56)

鬼ノ吞セムソラ可吞クモ非ズ
銅ノ湯ヲ、心ト泣く／＼吞也ケ
リ。

心バセ有ル人ソラ物ニ躓テ倒
ル事常ノ事也。今巻二十八(6)

五巻第十号) という論文の中で、院政期から鎌倉期における「ス
ラ」の後退に伴う「ダニ」の進出がなされたものと推察されて
いるが、そのような状況に合せて、「すら」は漢文訓読的な文体
に、「だに」「さえ」は和文的な文体に用いられることが多いと
いう点に加わって、両書の「だに」「ソラ」の使用状況が作られ
たと思われるのである。

Ⅵ 助詞的用法をもつ『ヲ以テ』『ニ依テ』『トシテ』『ガ
為ニ』『ヲシテ』

平安時代の漢文訓読文を見ると、「ヲ以テ」「ニ依テ」「トシ
テ」「ガ為ニ」「ヲシテ」等が助詞のように使われているが、そ
れに反して和歌や物語文学の世界ではその用例を殆どみない現状
である。このような使い分けが見られる助詞的用法を持つ一群か
ら両書の傾向を予想してみたい。

1 『ヲ以テ』

まず両書の使用度を見ると、次の表のようになる。(表7)

この結果から、「今昔」の使用度数が多いことが認められるが、
「宇治拾遺」にも一二例ほどあり、一例を除いて他はすべて、「今
昔」と共通した使われ方をしている。その一例は第九十七話の
「盗跖と孔子と問答事」に『道理をもて、身のかざりとし』（今
昔では『道理ヲ身の莊トシテ』とある）の部分に示されている。

	今	字
四	1	0
五	4	4
六	1	0
九	7	0
十	2	2
十四	3	0
十五	1	0
十六	3	0
十九	2	0
二十	5	1
二十三	11	2
二十四	1	0
二十五	3	0
二十六	2	1
二十七	0	0
二十八	8	0
二十九	2	2
三十二	0	0
計	56	12

表 7

このように「をもて」を単独に用いることは、前述した如き編者の筆録態度に考え合せると、理解できるのであり、その語が漢文的要素として不可欠の存在のように見えてくる。「今昔」の残りの「ヲ以テ」の内、二六例は「宇治拾遺」の何らかの助詞と対応している。それを具体的に示すと、

(a) 格助詞『して』と対応している場合

これ、人してとり奉らん折
に、おこせ給へ (字 23)
此ノ荒巻三巻、人ヲ以テ取り
ニ奉ラム時ニ遣ハセ

その布一むらして、轡やあや
しの鞍にかへて (字 96)
布一段ヲ以テ賤ノ鞍ニ替ヘテ
今巻二十八 (30)
今巻十六 (28)

この他に第九十六話、第百六十七話、第百九十一話に二例づつ、計八例ある。

(b) 格助詞『に』に対応している場合……二例

人にふますれば、つぶたちた一人ヲ以テ踏スレバ、黒クツブ

る孔ごとに、 (字 25)
弟子の法師に、平なる板の一
尺ばかりなるが、 (字 25)

(c) 格助詞『にて』と対応する場合……一四例

しろき虫の孔ごとに指しいづ
るを、毛ぬきにてぬけば、 (字 25)
白キ小虫ノ穴毎ニ指出タルヲ、
鑷子ヲ以テ抜ケバ

沓のきびすを、刀にてきりた
るやうに (字 31)
沓ヲモ踵ヲモ刀ヲ以テ切タル
様ニ

あをき薄様に、口をつゝみ
たり。 (字 124)
青キ薄様ヲ以テ裏ヲ持セタリ。
今巻二十八 (21)

その湯にて頭あらひて、そり
て、戒さづけつれば (字 136)
其ノ湯ヲ以テ翁頭ヲ洗テ剃ツ。
今巻十九 (13)

以上の他に 89 91 (二例) 96 102 164 (二例) 166 177 192 の各話

に用例が見られる。

(d) 格助詞『を』と対応している場合

かみをよくかき入たるに、と一髪ヲ以テ吉ク搔入タルニ、被

らへらるゝ物なり。(字162)一捕ル也。今卷二十八(7)

2 『ニ依テ』

その使用状況は次のごとくである。(表8)

	今	字
四	1	0
五	6	3
六	1	0
九	3	1
十	2	3
十四	15	7
十五	4	2
十六	2	0
十九	3	0
二十	4	2
二十三	0	0
二十四	2	1
二十五	0	0
二十六	1	0
二十七	0	0
二十八	1	1
二十九	0	0
三十二	0	0
計	45	20

表 8

ここにおいても「今昔」の使用度が高らかに高いことが示されている。「宇治拾遺」に存する「ニ依テ」は「によりて」「により」(第百二十二話に見られる二例)の形で表わされる二〇例であるが、このうち四例を除いて他は「今昔」と共通している。

(a) 「宇治拾遺」のみの四例

「わ女は、なにの心によりて、
我らが涼みにくるだに、あつ
く、苦しく、大事なる道を、涼
まんと思ふによりて、のぼり
くるだにこそあれ (字30)

このことをおそろゝるにより

「姫ハ、何ノ心有テ、我等ガ
若キソラ冷マンガ為ニ来ルソ
ラ猶苦シキニ、冷マムガ為ナ
リト思ヘドモ、冷ム事モ无シ。
亦、為ル事モ无キニ、

今卷十(36)

此事ヲ恐ルゝガ故ニ深キ山ニ

て、かゝる深き山にかくれて 隠テ

今卷五(18)

その罪によりて、きはまりな
き苦を受くるを…… (字102)

「今昔」は欠文でこの表現に
対応する部分がない。

第百二話の例は「今昔」が欠文と思われるので、はつきりしたこと
はいえないが、第三十話「唐卒都婆血つく事」は唐の卒都婆に題
材を求めた説話であり、第九十二話「五色鹿事」もやはり唐の説
話であつて、漢文的雰囲気要充分にある所から、編者が意図的に
この語を用いて漢文的色彩を高めようと計つた結果が「によりて」
の単独使用を生んだのではないかと思われるのである。以上を除
いた「今昔」における残りの二五例のうち、六例の「ニ依テ」が
「宇治拾遺」の幾つかの助詞に対応している。

(b) 接続助詞『て』に対応しているもの

いとほしく思ひて、中の垣を破て、我門より出し給へといひつる (字24)

(c) 格助詞『にて』に対応しているもの

さばかりの罪にては、地獄におつべきやうなし。 (字55)
願をおこして、その力にてゆるされつる事など (字102)
何事にてのぼられたるぞ (字183)

(d) 接続助詞『ば』に対してしているもの

心をば女のもとに置きて、書き奉たれば、其功德のかなはずして (字102)

「よびて給はらむ。其あだ報ぜん」と、うれへ申せば、此たびは、道理にて召さるべき度にあらねども (字102)

3 『トシテ』

この使用状況は次の通り (表9)

今昔 巻数	今	字
四	0	0
五	3	1
六	0	0
九	1	0
十	11	2
十四	1	0
十五	3	1
十六	2	0
十九	0	0
二十三	0	0
三十三	1	0
三十四	1	0
三十五	2	0
三十六	0	0
三十七	0	0
三十八	0	0
三十九	0	0
三十二	0	0
計	25	4

表 9

ここにおいても又、「今昔」の使用度数は「宇治拾遺」を圧倒している。

(a) 格助詞『に』の場合

「宇治拾遺」中の四例の「として」はすべて「今昔」と共通しているが、一方、「今昔」のその他の「トシテ」に対して何らか

なり。
我は河伯神の使に、江湖へ行 (字196)

我レハ此レ河伯神ノ使トシテ
高麗ニ行ク也。 今巻十(11)

(b) 係助詞『も』の場合

なんぢがいふ事ども、一もあ
たらず。
(宇 197)

一も用ゆべからず。(宇 197)

4 『ガ為ニ』

今昔 卷数	今	字
四	0	0
五	3	0
六	2	0
九	4	0
十	7	1
十四	1	0
十五	1	0
十六	0	0
十九	1	0
二十	4	0
二十三	0	0
三十四	0	0
三十五	0	0
三十六	0	0
三十七	0	0
三十八	0	0
三十九	1	0
四十	0	0
計	24	1

表 10

これに關しても前と同様の結果を得る。「宇治拾遺」に一例見る
「がために」は第九十話「帽子兒与孔子問答事」に存し、「今昔」
にも共通に見られるものである。その他の「今昔」使用の「が為
ニ」に対応する「宇治拾遺」の助詞等を考えると、

イ 格助詞『が』を略した『ために』で応じている場合

世の政を直さむために、まか
りありく人なり
(宇 90)

我ら宝をもとめんために出で
にしに、
(宇 91)

仏法をつたへんために、遙に
西天より来りわたれるなり
(宇 195)

心ヲ行サムガ為ニ罷り行ク翁
也。
今卷十(10)

財ヲ求ムガ為ニ南海ニ出デ
行クニ
今卷五(1)

仏ノ教法ヲ伝ヘムガ為ニ遙ニ
此土ニ来レリ
今卷六(1)

ロ 格助詞『に』を用いている場合

いとほしければ、とぶらひに
行たりつるに、
(宇 24)

あきないしに新羅にわたりけ
るが、
(宇 39)

足きりに率て行きて、きらん
とする程に、
(宇 58)

以上の他に 30 164 196 197 の各話に一例づつ、計七例ある。

哀レニ糸惜ケレバ、訪ハムガ
為ニ行タリツルニ、
今卷二十(44)

商セムガ為ニ、船一ツニ数ノ
人乗テ、新羅ニ渡ニケリ。
今卷二十九(31)

足ヲ切ラムガ為ニ川原ニ将行
テ、既ニ足ヲ切ラムト為ル時
ニ、
今卷十五(22)

ハ 接続助詞『とて』を用いている場合

その悦びいはんとて、よびつ
其ノ喜ビ云ムガ為ニ此ク呼ビ
るなり
(字191) 入レタル也 今卷十四(35)

5 『ガ故ニ』

「宇治拾遺」には一例も見当たらないが、「今昔」には、卷五、卷六、卷十六、卷二十(二例)の計五例を見ることが出来る。このうち、卷五(18)にある「ガ故ニ」が「宇治拾遺」の第九十二話「五色鹿事」の「によりて」に対応しているだけで、他は「今昔」だけの文に用いられている。

6 『ニ於テ』

この形は「今昔」に二例、「宇治拾遺」に一例あるが、その例は共通になつてゐる。

おのれにおきてはさせること
我レニ於テハ年モ老タリ。
もなし
(字183) 今卷二十(43)

7 『ヲシテ』

「今昔」の卷二十八(21)に一例あるが、「宇治拾遺」では格助詞「にて」を当ててゐる。

ひた青なる装束にて、青き食
ヒタ青ナル装束ヲシテ、青キ
物ども持たせて…
食物ノ限ヲ持セテ…
(字124)

今卷二十八(21)

以上のこれらの助詞的用法を持つ一群の語彙は「今昔」に多用されている結果を得た。この結果は不十分であるとはいへ両書の傾向を知る一つの目安として検討されてよいと思うのである。

これまで若干の助詞、あるいは助詞的用法を持つ語彙から両書の文体傾向を探つてきたが、それらはいづれも確定的な裏付けになることはできないとしても、両書の和漢混淆文に、より和文的な、また、より漢文的な色合を深める役割は果し得たと考えている。

なお、ここでは前述以外の格助詞、接続助詞、および終助詞は割愛した。

二 助動詞からの考察

助動詞においても助詞と同様の方法から検討していくものである。すなわち、「宇治拾遺」の文体が「今昔」のものに較べて和文的であることを予想して、一応、和文的部分と漢文的部分の間に使用上の差異を生ずると思われる助動詞から両書を比較検討して、その文体傾向を探ろうとするものである。その対象となる助動詞は(一)「す・さす・しむ」(二)「如し・様なり」(三)「むず・むとす」(四)命令用法を持つ「べし」である。

(一) 使役の助動詞『す』『さす』『しむ』

「しむ」は平安時代から主として文章語として用いられ、訓点

資料に多く用いられてきた。それに対して「す」「さす」は日記、和歌、物語などの文献に散在し、「す」「さす」と「しむ」はちようど対照的な関係にあつたのである。^{註7}堀田要治氏の「今昔」における「す」「さす」「しむ」に関する論文によると、漢文訓読的色彩の濃厚な巻二十以前には「しむ」が、以後には「す」「さ

す」が頻用されていることが認められるが、ここではそのような状況を踏まえて、両書のうち「しむ」が多用されているものを漢文的、「しむ」の勢力が後退して「す」「さす」が多く用いられているものを和文的と予想して、三助動詞から両書を検討したい。まず、両書の使用状況は次の通り。(表11)

今昔 巻数	す		さ		し	
	今	字	今	字	今	字
四	0	0	0	0	0	1
五	2	2	1	1	2	0
六	0	0	0	0	1	1
九	0	3	0	0	2	0
十	0	7	0	0	8	0
十四	1	5	1	5	3	0
十五	1	0	0	0	0	0
十六	27	43	2	3	3	0
十九	5	6	1	1	3	0
二十	6	12	1	2	8	0
三三	9	3	0	2	0	0
三四	5	6	1	3	5	1
三五	4	3	1	1	1	0
三六	15	18	2	1	2	0
三七	1	2	2	2	0	0
三八	17	12	4	6	0	0
三九	1	0	0	0	0	0
四二	0	0	0	0	0	0
計	94	122	16	27	38	3
両書 共通数	52		15		2	

表 11

この表を見ると、「今昔」の方が漢文的色彩が濃いと言えよう。「宇治拾遺」は使役表現として「しむ」をほとんど用いず、もっぱら「す」「さす」に拠っていたものと思われる。「宇治拾遺」

中の「しむ」三例の内、二例は「今昔」と共通しているが、第七十四話に見える「しむ」は単独に用いられている。この説話が天竺の優婆崛多に取材したものであるだけに、この「しむ」の用

法は助詞の項でも述べたように編者の意向が反映されている語法ではあるまいかと思われるのである。更に、このような結果は「今昔」中の「しむ」が「宇治拾遺」では「す」「さす」に置き換えられているという対比関係に結びついている。いまその状況を具体的に示すと、

(a) 『す』に置き換えられている場合(一六例)

その得たりける田を、半らは人につくらせ、いま半らは我料につくらせたりけるが、

(宇 96)

なんぢに経あつらへて書かせ

たる者どもの

(宇 102)

「……大切なことなり」とい

はすれば

(宇 122)

以上の他に30(四例)

104

122

128

168(二例)

169

192(二例)

197

の各説話に見られる。

(b) 『さす』の場合(三例)

たゞこぼちにこぼちて、それよりぞ出させける。
近く遠く尋させけれども、

(宇 24)

(宇 108)

其ノ田ヲ其ノ渡ノ人ニ預テ令^{ツクラ}作^{サス}テ
今卷十六(28)

汝ニ経詔ヘテ令書^{カカシメ}シ者共ノ

今卷十四(29)

「……極テ大切也」ト令云^{イハシム}レバ、

今卷二十四(18)

只壞ニ令壞テ、其ヨリナム死
人車令出^{イダシメ}ケル。
今卷二十(44)
近ク遠ク令尋^{タツネシメ}ケレドモ
今卷十六(7)

その願とげさせて、 (宇 102)

其ノ願ヲ令遂^{トゲンシ}メテ

今卷十四(29)

これらの現象は僅かなものではあるが、両書の文体性質より生ずる注意すべき相違を示している。

(二) 『如し』と『様なり』(ここでは『如し』に対応させて助動詞と考える)

「ごとし」と「様なり」は共に比況の用法で代表される助動詞であるが、その使用においては幾分の相違が出てくるように思われる。それは、平安時代の和文系の文献では共に用いられているが、同時代の訓点資料においては、「ごとし」による場合が多いと見られるからである。この傾向は堀田要治氏の「『如し』と『様なり』とから見た今昔物語の文章」(『国語と国文学』第十八卷十号)の論文にはつきり裏付けられている。それによると、漢文訓読的色彩を強く打ち出している卷二十以前の各巻は「ごとし」を多用し、卷二十以後次第に「様なり」が勢いを増していることが理解される。従つて、一般に「ごとし」は漢文的色彩の部分に、「様なり」は和文的部分に多用されるという可能性を考慮して、両書の傾向を見ていくと、

	ご と し		かくのごとし		様 な り		か様なり	
	今	字	今	字	今	字	今	字
四	2	1	2	1	0	0	0	2
五	5	5	3	1	3	2	0	0
六	1	0	2	1	0	0	0	0
九	1	0	0	0	1	1	0	0
十	5	1	4	1	1	2	0	0
十四	5	0	0	0	3	8	0	0
十五	0	0	0	0	1	1	0	0
十六	2	0	1	0	6	9	0	1
十九	1	1	2	0	7	3	0	3
二十	11	3	3	1	8	12	0	0
三三	1	0	0	0	20	15	2	2
三四	0	0	0	0	2	2	4	4
三五	4	1	1	0	4	4	1	1
三六	1	1	2	1	5	4	5	3
三七	0	0	0	0	1	2	1	1
三八	0	1	3	3	10	13	1	1
三九	1	1	0	0	3	1	0	0
三二	0	0	0	0	6	7	0	0
計	40	15	23	9	81	86	14	17
共通数	9		7		55		10	

表 12

この表では四助動詞にまとめているが、「ごとし」は「ごとなり」「ごとくの」「ごと」を、「かくのごとし」は「かくのごとなり」「かくのごとくして」「かくのごとくにて」を、「か様なり」は「さやふなり」「このやうなり」「かやふの」「さやふの」等を一括して代表するものとした。

この表からは明確な結果は得られないが、「ごとし」「かくのごとし」の使用度は「今昔」が、「様なり」「か様なり」は「宇治拾遺」が多くなっていることが窺われる。更に個々の説話を見ると、両書の間「ごとし」と「様なり」の交換が行なわれているが、そのうち、「宇治拾遺」の「ごとし」が「今昔」で「様な

り」となっている場合が二例（「宇39」と「今巻二十九(31)」、「宇104」と「今巻二十(13)」）あり、その逆の場合が八例ある。（煩雑を避ける為に「宇治拾遺」の説話番号で示すと、102 104 106(三例) 128 192 197の各説話に見られる）比況を表わす助動詞の使用状況には顕著な相違点は認められないが、総括的に言えば、「今昔」

の方が漢文的色彩を打ち出しているように思われる。

③ 『むず』と『むとす』

漢文訓読体の文章では「欲」「将」「為」「且」など「…セムトス」と訓ずる語が多いので、訓点資料にて「むとす」が使用される範囲は広いことが知られているが、「むとす」から生じたと考えられる「むず」（んず）はその使用を見ないのである。しかしながら、和文献にはいくらか見ることが出来る。吉田春彦氏は「中古近古における推量語『むず』『むとす』の用法」でこれに関する論を展開されているが、一般に平安時代の王朝文学類に用いられた「むず」「むとす」は「女流文学を中心とする純和文系のものほど勢力が弱い、比較的に見れば、『むず』は時代が下る程頻用され、更に漢文訓読語『むとす』が和文に用いられているの

は文語体の用語としてである」と認められ、また「『むず』は必ずしも和文的性格を決定する条件ではなく『むず』は談話口調体を示すものである」と結論されている点は注目すべきである。これに加えて、「今昔」中の漢文的な天竺震旦部や仏教説話を持つ本朝部では「むとす」が多用される一方、和文的色調の濃い本朝部では「むず」が増加していることが明らかにされていること、更に「宇治拾遺」よりはるかに和文化的なと考えられる「古本説話集」では「むず」が頻用されていることを考え合せば、「むず」が鎌倉時代の常用語であつたとしても、両書と比較する場合、そこには何らかの結果が示されると考えて、あえてこの二助動詞から両書の文体に触れる次第である。その使用状況は(表13)

	む と す		む ず	
	今	字	今	字
四	0	0	0	2
五	4	2	0	0
六	1	1	0	0
九	8	2	1	2
十	7	4	0	0
十四	2	2	1	3
十五	2	1	0	0
十六	8	0	9	12
十九	2	0	0	4
二十	3	2	3	1
二十三	8	1	8	9
三十四	2	1	0	1
三十五	1	0	0	3
三十六	1	0	1	1
三十七	1	0	0	0
三十八	5	4	1	2
三十九	0	0	0	0
三十二	2	0	1	1
総計	57	19	25	41
共通数	10		10	

表 13

これによると、「むとす」は「今昔」が、「むず」は「宇治拾遺」が、その使用数において勝っている。このことは「今昔」の「むとす」が「宇治拾遺」では「むず」（んず）に置き換えられるという現象に繋つてゐる。

それには、かくやはせんずる。

(宇25)

あす通らんにも、かならず、

けふのやうにせんずらん。

(宇31)

いかやうにてかおはしまさん

ずる。

こはいかゞせんずる。

(宇96)

かゝる旅にてはいかゞせんずる。

(宇96)

いかゞせんずる。

我もかゝる物を飲まんずるか

と思ふに

今しばしあらば、午時になり

なんず

(宇112)

(宇136)

此ヤセムト為ル

今卷二十八(20)

明日通ラムニ、今日ノ様ニ制

セムトスラム 今卷二十三(21)

何様ナル姿シテ来給ハムト為

ルゾ。 今卷十九(11)

此ハ何ガセムト為ル

今卷十六(28)

此ル旅ニテハ何ニカハセムト
為ル。 (右同)

此ハ何ガセムト為ル。(右同)

我レモ此ル物ヲ吞ムト為ルニ

コソ有ケル 今卷十九(20)

今暫ク有ラバ、午時ニ成ナム

トス。 今卷十九(13)

殿歸おはしての後に、案内申
て、ゆるさんずるぞ。(宇167)
家ノ主出ヌレバ、還リ来テ後ニ
告ゲテ免サムト為ル也。

今卷九(18)

(宇112、宇136を除いた他は会話文である)

九例ほど例示したが、このうち、七例までが会話文中によるものであるため、鎌倉期の口語として「むず」が使用されていたことは否めないが、「むとす」と「むず」の置き換えはやはり両書の文体傾向を決める要素として重要性を帯びていると思われる。

四 命令の用法『べし』

註。
命令の助動詞「べし」は訓点資料に多用されるものの、和文献にはその使用があまり知られていないので、そこにはある種の使い分けがあつたのではないかと想像される。そこで両書を「べし」から考えてみたいと思うのである。

「宇治拾遺」の「べし」は「推量・義務・当然・可能・妥当(勧誘)・意志・予想」等多用化されているが、「命令」の意味を持つ「べし」は一例を見るのみである。その一例は「今昔」巻十九話(11)と同文関係にある、第八十九話「信濃国筑摩湯に観音沐浴事」に見られる。一方「今昔」における命令用法の「べし」はしばしば使用されている。(表14)

今昔 巻数	今
四	1
五	3
六	1
九	0
十	3
十四	1
十五	2
十六	1
十九	2
二十	1
二十三	2
三十四	2
三十五	0
三十六	1
三十七	0
三十八	0
三十九	0
三十二	1
計	21

表 14

その用例は二一例見られるが、そのうち、九例ほど「宇治拾遺」に対応している。その対応状況を具体的に示すと、

「…さだめてやうあるらん。」

射事なかれ」

(宇92)

「…この宣旨にそむきて鹿の一頭にて、ころす者あらば、すみやかに死罪に行はるべし」

(宇92)

「かしこき人にこそあなれ。」

とくよび奉れ」

(宇90)

「この里の人々、とく逃げのきて命生きよ。」

(宇30)

「汝来れる故はいかにぞ。慥に申せ」

(宇197)

「…暫ク任せテ彼レガ為ム様ヲ可^ミ見シ」

今卷五(18)

「…若シ此ノ宣旨ヲ背^{ソム}テ、鹿一ニテモ斂セル者有ラバ、其ノ人ヲ斂シ家ヲ可^ホ亡シ」

今卷五(18)

「其レハ、極タル賢キ人ニコソ有ナレ。速ニ可^ヨ呼還シ」

今卷十(10)

「此ノ里ノ人、速ニ、此ノ里ヲ去テ、命ヲ可^イ生シ。…」

今卷十(36)

「汝が来レル故ハ何ゾ、慥ニ可^マ申シ」

今卷十(15)

「寺に帰て、なほ御祈りよく申せ」と

(宇192)

「…されば、とくとく一石誦経にせよ」といひければ

(宇56)

「この足のかはりにわが足をきれ。…」

(宇58)

「…馬二に鞍置きて具して、をのこども高嶋の津に参りあへといへ。…」

(宇18)

「汝デ、速ニ、寺ニ返テ、弥可^イ祈請シ」ト。今卷十四(36)

「…然レバ、速ニ米一石ヲ以テ寺ニ送リ可^タ奉シ」ト云バ、今卷十五(4)

「此ノ足ノ代ニ我が足ヲ可切シ。」今卷十五(22)

「…高嶋ノ辺ニ、男共、迎ヘニ、馬二疋鞍置テ可^マ詣来」ト。今卷二十六(17)

以上をあげることができる。

「今昔」巻五(18)に対応する「宇治拾遺」第九十二話「五色鹿事」に一例漢文的な禁止表現「なかれ」が見られるほか、他の八例（「宇92」の「べし」は推量表現と考えるものである）は動詞と助動詞の命令形をもつて「今昔」の「べし」に対応している。その第九十二話の禁止表現「なかれ」は前述のごとく編者の意図が

反映しているような使われ方を示している。以上が「べし」における両書の状況であるが、命令用法として「べし」が使用されている個所は表現が非常に堅く、「今昔」の場合を見ても分かるように、その周囲には漢文的表現がかなり存在している。従つて柔らかなで流れるような表現の和文とは相容れない雰囲気を持つ「べし」はそこにおいてあまり使用されなかつたのではなからうか。一応、「べし」における両書の状況は前述したとき結果を得たのである。

以上の四助動詞から文体傾向を探つた次第だが、明解な回答は得られなかつたとはいへ、その動向を示す役割は果したものである。うのである。

結 び

「宇治拾遺」の解釈上の立場から得た性質―和文的要素の濃い和漢混濁体―を実証的側面から明らかにすることを心掛け、結果的にはある程度の裏付けが得られたものの、そこにはまだ、実証という枠では捉えきれない一面があることを認めないわけにはいかなかった。これは別な立場すなわち鎌倉期の口語資料として、またその周辺にある説話集との伝承性を持つものとして、その特質を探る際にも生ずる問題である。こうした事情を考慮すると、そこには予想外の発展も可能な説話独特の姿勢が内在し、その結

果、実証だけでは把握できない説話世界の広がりをお示ししているように思われるのである。「宇治拾遺」が特異な作品として、独自の文学性を保持している理由も今さらながら理解した次第である。

- 註1 築島 裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』
- 2 松尾 捨「平安初期に於ける格助詞『を』」(『国語と国文学』第十五卷第十号)
- 3 築島 裕『平安時代の漢文訓読法語につきての研究』五十五頁参照
- 4 1に同じ。
山田孝雄『平安朝文法史』
- 5 築島 裕「中古漢文訓読文の文構造」(『国語と国文学』第三十一卷第九号)
- 6 1に同じ。
山田 巖「今昔物語の文法」(『日本文法講座』4「解釈文法篇」)
- 7 堀田要治「今昔物語集に於ける使役の助動詞ス、サス、シムについて」(『橋本博士還暦記念国語学論集』)
- 8 1に同じ。